

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

ハイスクールD×D 道を貫きし者

### 【作者名】

シヤニムニ

### 【あらすじ】

兵藤一誠の幼なじみの本道進のハイスクールバトルアクション!!!  
二次ファンから移転してきました。どうぞよろしく!!!

## 俺とあいつの日常編

「俺、彼女ができたんだッ!!」

そんな天地が前周りして後ろ周りしてハンドスプリングしてトリプルアクセルしてもあり得ないような話を聞かされることになった春。いきなりそんな夢物語をいいだした少年、イッセーこと兵藤一誠。

これがもし普通の男子ならサバトの生け贄ぐらいすませたが、こいつの場合は違う。

なんてったってエロい。まあ、エロい奴はこの年ならだいたいそうだろ。みんなエロ本の一冊や二冊くらいは常備してるだろ。けど、こいつはここで終わらない。学校……いや、近隣の学校に通ってる奴なら大体が知っているほどのコイツはエロい。むしろエロさしかない。エロの為に生きてる様なもんだ。ほんと……将来、一体何になるんだ？頼むから犯罪にだけは手を染めないでくれよ……。

それが、俺、本道 ほんどう 進 すすむ がみてきた。兵藤一誠という存在の簡単な理解だ。

そんな奴であったせいとか、俺ははじめこいつのいつていことがまったく理解できなかった。いやいや、真剣に頭に変な菌がわいちまったんじゃないかと思ったよ。

「うるっせえーぞ、イッセー！ギャルゲ出来ねえじやねえかッ!! 大体、んな地球が四回転半しようとして失敗して今から地球が太陽に突っ込むみたいな嘘 いわなくていいんだよッ!!」

「事実だよ!!てか、俺が女の子と付き合つのは世界 滅亡並の嘘と同列なくらい信じられないことなのッ !!あと地球どれだけ俊敏なんだよッ!」

「っせえーな、うるっせえーなッ!!こちとら今から ギャルゲして二次元の嫁たちに会いにいこうとして るのを、お前に止められて殺意がわいてんだよッ!! しかも、理由が彼女ができたからあ!?!んな有り得ない事言っつてないでささっさと帰ってシッってねるッ!!」

まったく、イライラする。俺ははやく嫁たちに会い たいんだ。

「いやだからホントだってッ!!ほらッ!!携帯見ろって ッ!!女の子の名前書いたるじゃんかッ!!」

そう言っつて顔の前携帯電話の液晶画面を無理やりを 近づけてきた。

「ほら、見ろって。ちゃんと女の子の名前があるだ ろ?」

そういつて見せてきたディスプレイにはくっきりと (天野夕麻)と書いてあった。

「てんの…ゆづま?え?男?」

読めん…。いやまじで…目が悪いとかじゃなく頭が 悪い方向で読めない。

「あ・ま・の・ゆ・う・まッ!!!ホント頭弱いな……」

そう言っつて俺に残念そうな視線を向けてくるイッ セー。

「悪かったなッ!! 実際頭が悪くなった原因は親父の せいだッ!!」

ホント、あれはないわ…。なんでガキの頃からあんなに殴られなくちゃならん。拳法の練習とか、修行とかいうレベルの話じゃねえだろあれ…。

「まあ…アレはヒドかったけど…。俺の親が何度育 児機関に連絡したか…。ってそんなことほっといて 彼女だよ、彼女。」

ほっとくな。こちとら命がけだったんだぞ、こら。 雨も嵐も雷も関係なく毎日死んだ。文字通り心停 止してた。そのたびに一撃胸に食らって心臓を動か させられてた…。もう行き過ぎてさー。三途の川に 知り合いがきちまうぐらい。まあ、それは置いていいだ。

「イッサー……………、ついに空想彼女を創るようになってしまったか……………。待ってる、今すぐ腕のいい精 神科に…」

「違つっつーのッ! 事実だったのッ!! どうしたらわ かってくれるのさッ! 少しは親友の言葉を信用して ほしいんですけど?!」

「ハッハッハッ…。一ミリも信用してねえよ」

「いやいや、信じるよ。なんで十年來の友の話を信 じてくんねえーんだよッ!!」

「逆に聞くが普段から色欲全開でクラスどころか学 校通り越して地域の皆様方が知るぐらいの変態歴が 十年以上あるこのあたりの女子からゴキブリの大群 が寄せ集まったものをみるような視線を常日頃向け られる奴がいきなり彼女できたっていわれて、おま え信

「じるか？」

「無理……です……」

「だろ？それが今俺が抱いてる気持ち。今すぐいで も墓にぶち込んでやりたいの我慢して青酸カリ飲ま してあの世に送るので手をうつてやるつと考える 俺の慈悲に感謝して自殺しろよ」

「ああ、ありが……。ってどれもエンディングにむか ってるんですけど!? 感謝を要求できる要素一ミリも 見えないんですけど」

「チツ…バレたか……」

「俺、時々。お前との付き合い方を真剣に考えるべ きだとおもっただけど……」

んな事知ったこっちゃねーっての。

とまあ、そんなやりとりがあつてしばらくたつたが、いまだに話し合いに決着がつかないでいた。

「ああ〜まあ、世界滅亡がほんとに今すぐ起きると 言つのも信じてしまつと仮定において、おまえに彼 女が出来たとしよう」

「ああ、……ん、もぐっ……んぐ。そうしてくね。 しかしてこのほじれん草のお浸し旨いな」

「はぐっ……もぐもぐ……。そうかあ？」

とりあえず、イツセーが晩飯まだだというのでは晩飯食いながら話を続ける事にした。

「まあ、それよりもだ。んでなんで俺の所に報告な んざにきた。ただ自慢したかったってだけなら明日 学校の屋上からお前全裸にして パイルドライバーがますからな」

「じぶっ」

俺の言葉に喉に食べ物詰まらせるイツセー。みる と心なしか顔色が悪い。

「なんだ凶星か？ だったらコロサナキヤナランノダ ガー？」

なんだってリア充の誕生を祝福しなきゃならんのか なぁー？ かな？

「いや、その。待ってくれ。確かに一割はそうだけ ど…」

「よし、すなおに話したのでパイルドライバーはやめて床に画鋲敷き詰めてそこに顔面からバックドロップするので手を打とう」

「すげー…譲歩してるように見えて一ミリも譲歩してない。その上、顔面をスタボロにするだけで生殺しにもほどがある…。鬼だ、鬼がいる…」

「んで、残りの九割は？」

俺が今日のメインである魚に箸を入れながらイツセーにきく。

「あ、ああ…実は…」

「…ってわけで、手伝ってくんね？」

「……………」

イツセーの頼みを要約するところだ。《いきなり彼女 女出来たんだけどどうしたらいいかまったくわかりません。デートもしたことないからどうしたらいい か一緒にかんがえてよ》ってことだそうだ。

「とりあえず、何はともあれぶっ殺していいか？」

「待つんだ!!確かに俺もおまえの立場なら迷わずそう言っていたが落ち着いてくれッ!!!」

ハッハッハッ…。そんなムチャな。

「俺の右腕が手めえを殺せとひしめき合っ…」

「おちつけ、今度ギャルゲー本奢るから」

「任せろ、イツセーッ!!デートにかんしちゃ俺の右腕にできるものは五万といるッ!!」

「スタイリッシュ手の平替えしッ!?!」

「さあ、始めようじゃないかッ!!カマンカマンッ!!!」

どんどんいちゃあー!!!デートときいちゃあ、ギャルゲで培った経験

が生かせるぜッ!!!

「じゃ、じゃあ。進ッ!!!まず何かからすれば!」

「知らん」

「さらなるスタイリッシュ手の平替えし!!う、うら ぎりが速すぎる」

狼狽するイッサーに手で静止させる。

「まあ、まで。イッサー。落ち着け。策ならある」

「な、なにー?い、いったいどんな」

かなり驚いた顔をして近づくイッサー。俺は更それを 手で制止させてから言葉が続ける。

俺は立ち上がり両手を大きく広げながらイッサーに 問いかけた。

「イッサーよ。おお、イッサーよ。我が十年來の下 僕でありぼる雑巾よ。俺の趣味を述べてみよ」

「え?色々とツッコミ所はあるけどまあ、話を進め たいんでむしろ けど。ギャルゲだよな?」

「そうだッ!!!私の趣味はギャルゲッ!!!それも若干十 を数える頃から 続けている。いわば私の魂の癒しに も似たものだ。そしてイッサーよ。思い出すのだ。 ギャルゲの正式名称を!!!」

「ギャルゲって...確か...。ま、まさか!」

「そのまさかだよ、イッセー。ギャルゲの正式名称は《恋愛シミュレーションゲーム》つまり恋愛を想定したゲームなのだよ」

「なるほど、恋愛想定したゲームならデートに関する事の一つや二つはあるだろう、つまりそれを参考ににして…ッ!!!」

イッセーも立ち上がり目をきらきらと輝かしながら見てくる。俺も同じくらいテンションがあがりながらそれらに答える。

「ああ、さっきいったデートプランを決めちまおうッ!!!」

「あ、ありがとう進ッ!!!お前は天才だよッ!!!」

「誉めるなよ、ただ少し諸事情があつてな」

「な、何だ?どうしたんだ?」

「最近俺のパソコンのギャルゲのデータを整理しててな。今いっこしか入ってないんだ」

まあ、豆に整理しとかないとすぐいっぱいになって処理落ちとかなるからね。

「へえー、どんなゲーム?」

「いや、それがあんまり覚えてなくてだな。安売りの時にまとめて買った買ったもんでよ。とりあえず、入れるだけ入れといて放置してたのを整理したときに見つけたんだ、だからついだしそれを参考にししようかと」

「あー、まーなんでもいんじゃないかね?俺もギャルゲしただけどなんか数

えるほどしかしてないしね」「

それもそうだな。まあ、パッケージの後ろのCGにはデートみたいなのが合ったし大ジョブだろ。うん。

「んじゃ、デートの参考するために『怒りの日』ってゲームをするか!!!」

「おーっ!!!」

『あなたは既知感というものを『存じ』』

俺とあいつの日常編〜キンチヨー と起床〜

「  
.....  
ダルい」

地球は回る。どこの誰がんなことを調べたのはしらんが、今じゃ小学生でも知っているような常識だ。地球が回ることで昼と夜の切り替えが起きているようなものだ。人間はそれに合わせて活動している。それも人間が進化の中で編み出した無駄のない一番効率的なサイクルだと、どっかの誰かがいつていたようなないような。

「  
.....  
眠い」

そんなどうでもいいことを考えながら俺、本道進はとりあえず時刻を確認した。うん、朝一番にすることはそれだろ。この時刻しだいで朝の行動パターンがかわるからな.....。

「8時21時か.....」

うん、素晴らしいほど早起きだ、ここまで早起きなら普通に一時間目の授業は間違いない遅刻できる。だが、俺ほどの遅刻魔になるとこの程度で満足してちゃだめだ。最低でも三時間目くらいから学校に行き、四時間目から授業を受けよう。そのためには睡眠が必要だな、うん。では、寝るか。いやあ、春先だがまだ朝は寒いなあ、寒いのは嫌いだから布団から出たくないぜ.....。

いつとくがちゃんと学校にはいくぞ？ たぶん。もう一眠りしたらいくぞ？ ホントだぞ？ さっきもいったが、寒いのは嫌いなんだ。苦手

なんだ。ついでに朝は嫌いなんだ、太陽がケンカ売ってきてるように感じるんだ。だからもう少し暖かくなって太陽が沈んだら活動するようになるよ、うん。じゃ、おやすみ……………。

「……………ってなんでまた寝ようとしてんだよッ!! いい加減起きろよッ!! 遅刻するじゃないかッ!!」

いざ、眠りにつこうとした直後いつものアホの声でおこされる。つたく、野郎、今の声で眠気を逃しちまった。

「……………つたく、朝から大声出してんじゃねえぞイッセー。近所迷惑だろ、それ以上騒いだら尻に爆竹積めるぞ」

「俺の肛門をお釈迦様にしないでもらえますかッ!? てか、時間ヤバイじゃんかッ!! なんでこの目覚まし11時設定なんだよ!?!」

朝っぱらからうるさいやつだな、コイツ。つーか、なんで私服でうちにいるんだ? それに、いま起きたみたいな顔してやがる。

「おい、イッセー。なんでここにいる? 学校はどうした? さぼりか? まったくだらしない奴め」

「おまえにだけは言われたくないよッ!! 昨日、ここで2人でデートの参考にするためギャルゲやってたじゃんかッ!! 忘れたのかよッ!?! しかも、参考にしたゲームがデートの描写なんて極少なうえに面白かったから二人で夢中になってやってたのを忘れたのかよ!?!」

あーうつせーなごんちくしょうが……………。「ちとらあさは虫の居所がわりいんだよ……………」

「……………うつせーつってんだろつが、イッセー。お前がデートする話なん

ぞ覚えてるかってんだよ。

「ふざけんな、おい。おまえ昨日の晩にあったやり取りを今すぐ思い出させてのー!」

昨日の晩だあー…? うーんと…なんかそれっぽいことを話していたよな…、ああ、確か。

「お前がキ　チョールと付き合いだしたからデート考える話しか!!!」

「スプレー管とどうやってデートすんだよ!! アレか!? スプレー管をもって出掛けて時々頬を赤らめながらスプレー管をみるのかッ!? どんな状況じゃそりゃあ!? スプレー管と付き合い人間とかこの世にいるかあーッ!!!」

「るっせえーな…鼻にキンチョー　ぶっさすぞッ!」

「逆ギレ!? え? 悪いの俺の方なの!」

「俺、キン　ョールの事を愛する奴はちょっと…:…:…てか、かなり嫌だ」

「俺も殺虫剤のスプレー管と付き合いなんてごめんだったのッ!!」

「そ、そんな! 私の事は遊びだったの!」(進裏声)

「え? な、何!? 誰? まじ誰ッ!」

「ヒドい、ヒドいわ、イツセーさん!!」(進裏声)

「ま、まさかッ!? キンチョ　ルッ!? キンチョー　かいッ!」

「あなたの事をずっと好きでいたのに……そんな、そんなッ!!」

「ま、待ってくれッ!! キン チョールッ!! どこだ……どこにいるんだッ  
!?!」

「サヨナラ…… イッセーさん……」

「うわあああああああー……ッ!!!! キン チョー  
ルウウウウウー……!!!! 俺は、俺はッ!! 君(キン  
チョー) なしじゃッ!! 生きていけないんだあああー……!!  
なぜ、なぜなんだッ?! あれほど一緒にいて、同じ時間に生きて。あれ  
ほど、肌を重ね合ったのに……。あれほどッ!!! 君が与えてくれる力  
に涙し頼りにしていたのに……。どうしてだ、どうしてなんだ!! キン  
チョー……ルッ!!!!

てんな訳あるかッ!! なんでキンチョールにこんなに胸踊らせなきゃ  
行けないんだよッ!! おかしいだろッ!! キンチョー に恋する人間な  
んていてたまるかああッ!!!!」

「ま、そういうアホなコントしてる間に八時半だ」

「遅刻しちゃったじゃねえかあああー……ッ!!!!」

「とりあえず、俺は家に帰って着替えたりしてくるからその間に出来  
ることをちゃんとしとけよ?」

あんまりにもいじりすぎたせいでがちぎれしてしまったいたイッ  
セーが元に戻ったのは一時間目が半分終わった頃だった。ようやく

落ち着いたかと思ったたらいきなり帰りだそうとしやがってる。まったく、マナーがなってないよ、ホント。

「まあ、待てよイツ……………」またないツ!!……………」

バタンツ!!

そう言っって勢いよくドアを閉めて出て行きやがった。全く、人の話は最後まで聞くってお母様に習わなかったのかよ…。まあ、なにわともあれ。さっきのやりとりで眠気も吹っ飛んじまったからどうしようかな。やることはあるが、それやるとまたとやかく言われそうだな。

「はあ……………まあ、仕方ないなあ……………。偶には素直に従っとくか」

そんな事をばやきながら、制服のハンガーに手をのばすことにした。

その後、一時間ぐらいたったあと俺の住んでるマンションの前でイツセーを待ち、2人して登校するようになった。普段ならまだ、二時間目の中頃になんか登校はしないが、今日は1人うるさいのがいるため、しかたなく、しかたなく!!一緒に登校している。

と、となりのイツセーが妙にキョロキョロと周りを見ている。なんか探してんのか？

「イツセー、どうした？そんなに呼吸していると首ねじ切るぞ？」

「ああ、しめ……………って呼吸すら許されなんでしょうかねツ!!」

「当たり前だろ？」この世には存在するだけで人に迷惑がかかる存在がいるんだから。俺個人的にゴキブリと蚊とハエとイッセーは絶滅すべきだと思っただが……………」

「もっとも多くの人が嫌ってる存在に俺も含まれてるなんて……………」

「んで、世界四大害虫についてはどうでもいいから。さっきから何探してんだ？」

「ん？ああ、いや当然ながら他に登校してる奴がないなと……………」

そら、そだろ。「こんな時間帯じゃあ、いたとしても精々オバちゃんくらいだよ。てか、うちの学校の奴やら女子に会いたくないからこの時間帯で登校してるんだが…………」。

「そりゃあ、俺がほかの人間、特に女子と会いたくないからな。この時間帯ならまず会わない」

「ん？じゃあ、会ってくれる俺は特別ってことじゃ…ッ!？」

「そりゃあ、お前は害虫に部類される存在だからな。癩癩で殺してしまっても人じゃないから罪にならない」

「うむ……………」

イッセーが涙を流しながらそう呟く。まえから思ってたんだが、おまえの涙腺って自分の意志で弛めることができるのかよ。地味にすげー。

「まあ、それは置いて、何でいつもひとりで登校するんだよ」

イツセー、確かおまえ俺の家庭の事情知ってたと思うんだが…。  
まあ、いいか。

「単純に女という種族が恐いし怖いし強いからだよ」

もはや女って存在は俺にとって恐怖でしかない。世間一般の野郎はよくあんな存在のケツを追いかけて回すな…。

「進って、時々へたしるよな」

「やかましいわ」

「というか、世の中の女性すべてが怖い存在ではないだろ」

「アホか。世の中の女なんてみんなお母様みたいに恐ろしい存在なんだろ？」

「いやいや、全人類をお前の母さんみたいな存在ではないから」

「俺は、例え相手が幽霊や化け物や神や悪魔や墮天使だとしてもひとりで向かっていけるが、親父とお母様だけはダメなんだよ……………」

ホント、あれは恐ろしい存在だよ、あの二人……………。親父とか一人いれば国一つ軽く相手にならないし、その親父を一瞬で土下座させるお母様はさらなる上位の存在なんだよ。

「女ほど、」の世界で恐ろしいものはないだろ」

「いや、間違ってもみんながみんな彩音さんみたいじゃないから、というかそんなだったら俺今すぐ自殺するから」

まあ、お袋ほどの存在がこの世界のデフォだったら一瞬で各国の首相が女の人になるな。

「……っといッサー。グダグダしてたらこんな時間だ。もう走って二時間目は間に合わんな」

俺が時計を確認すると時刻は10時15分を指していた。もう走っても意味ねーな。

「はぁー、もういいや。進このままコンビニ言っただけ買ってから行こうぜ?」

「お、いッサーの割にはいいこと思い付くな。よし、害虫から昆虫に昇格させてやるわ」

「…ちなみに聞くけどその昆虫の種類は?」

「イナゴ的な何か」

「害虫とあんま大差ねえよッ!」

そんな事を話ながら学校に登校していった。

「ちなみに、キンチョールは買ったよ?」

「かわねえよッ!!!」

## 俺とあいつの日常編〜ベーコンとレタス〜

その後、途中のコンビニで昼飯をかって登校すると時刻は四時間目が始まる少しまえだった。靴を履き替え自身の在籍しているクラスに歩いていく。クラスには何事もなくつき、教室に入る。クラスメートとは一切会話せずに、自分の席についた。いやあ、窓際の席はいいなあ。ギャルゲの主人公みたいだぜ。

「よう。珍しいな、こんな時間にお前が来るなんてな」

「そうだな、しかもイッセーと来るなんてさらに珍しいな」

そういつて、やたら笑顔の丸坊主とメガネをかけたキザなやつがきた。2人ともイッセーの友達……てか、同種になる。まあ、俺もなんだがな。ええっと、名前が……。

「HAGEとメガネ。今日もウザいな。とりあえず人をやめてくれな  
いか？人じゃなきゃ殺しても罪にならん」

「相変わらず名前覚ええない奴だな……」

「いや、「コイツの頭のスペックを考えると当……グボラッ!」

とりあえず、メガネがウザイから殴った。俺だって好きで頭が悪いんじゃないよッ!!親父に頭殴られまくったせいで脳細胞が飛びまくっただけだっつーの。

「……?なんで元浜倒れてんの?」

と、そういつしてたらイッセーも来やがった。……ったく、一角に

男子四人も集まりやがって……うぜえっつーの。あと、ハゲ。テ  
メエ、じゃっかんイカ臭いぞ。何を……いやわかった、聞かないでい  
う。

「さあな。大方、自分という存在の無意味さと邪魔さに気づいたんだ  
ろっ。」

「お前のせいだよッ!!」

なんか、キレてきやがった。ったく。コレだから本田は嫌いなん  
だ。あと、勝手に人のせいにしてんじゃねえっての。

「まあ、落ち着けよ同士。それで本道、なんでイツセーときたんだ？い  
つもなら別々になるのに。それにおまえならもう一時間くらいサボ  
るのにな？」

HAGE 鈴木が話しかけてきた。窓際だから太陽の光が反射して  
うぜえ。頭の光を俺に向けんな、頼むから止めてくれ。溶けて死ぬ。

しかし、どう答えたらいいのか……、なるべく面白おかしく答え  
たいな。どちらかというと、イツセーをいじる方向で。

「いやな、昨日の夜にイツセーがいきなりうちのマンションに来てぞ。  
やることをやって気づいたら朝になってた」

瞬間。世界が静寂に包まれた

そう、例えるなら極北の風がこの空間を埋め尽くしたんだ。誰も  
止まってしまう世界。そんなにななかこの静寂につつまれた世界で  
イツセーがいち早く反応してくる。

「ちょっと待ってッ!?なんか色々端折りすぎだろッ!!もつと色々説明しろよッ!!例えば…」  
「うっ。なんかあるだろッ!!」

「イツセーがなんか必死だ。そらまあそうか。自分にベーコンにレタスなスキルつくかもかもしれないからな。いやあ、愉快愉快。俺?俺はその方がいい。何でかって?その方が女と喋る機会が減るからな。」

「と、女たちのヒソヒソ話が耳に入ってきた。こつみえても俺は身体能力が異常でな。俺の家系自体がもともと異常な身体能力をして産まれてくるらしいんだが、そこからさらに修行で異常に改造していく。つか、させられた。おもに親父に。」

「中でも親父が言うには、俺と親父は歴代の本道家の中でも1、2を争うほど身体能力が異常らしい。ふざけんなッ!!誰のせいでこうなったと思ってんだよッ!!謝れよッ!!俺の幼い頃の時間返せよッ!!ほんと、これのせいでどれだけのトラウマを植え付けられたか…」

「ちなみに、普段は抑えてはいるのだが、元々が高すぎるせいでそれでも同世代の奴からみたら異常だ。抑えに抑えても百メートルを10、ちよい台で出せるくらいの身体能力だ。」

「うっ。話がそれたな。つまりは俺の身体能力が異常だからこの教室ぐらいの大きさなら少し本気になれば小声での会話も全部拾えちまうんだわこれが。」

「やっぱり、本道クンって……」

「うん。前々からそんな感じの言動はしてたけど」

「けど、相手はッ!?やっぱり兵藤!?兵藤×本道クンなの!?!」

「イヤァッ!!そんなカップリングはいやよ!!やっぱり木場クン×本道クンが一番よッ!!美男子と中堅ッ!!これがベストよッ!!ちなみに攻めは本道クンよ」

「え?何言ってるの?兵藤×本道クンでしょそこはッ!!!幼なじみだった2人の関係があることをきっかけに一線を越えて……………ジュルリ」

「はあッ!?え?何言ってるの?一目見たときから木場クンに惚れてしまった本道クンが攻めに攻めまくるのが良いんじゃないッ!!!あなたのシチュは……………ぶっちゃけないわ」

「…アァッ!?!おまえ、なにほざいちゃってるの。そんなありふれたシチュでよく満足できるわね。木場クン木場クンってそんなにイケメンシチュがみたいならゲイバーにでも行きなさいよ。ありふれたあんたが満足できるシチュが転がりまくってるわよ?良かったですねー」

「……………おまえ、死ぬか?死にたいのか?そうか死にたいんだな?」

「アホなこと言ってる暇があるならあなたが先に死になさいよ。ホント、生きてる意味ないわ。幽霊にでもなってホモでも観察してろっての自称お姫様(笑)」

「ぶっ殺すぞクソアマァッ!!!」

「やってみるや三下ァッ!!」

なんだこのカオス!?!ここには変態しかいないのかよ!!いや、頼むから一人二人はぶつうな奴がいてほしい。俺も含めてこのクラス全員変態だなんてイヤだぞそんな事実。ていうかその女子二人ッ!!!なんで投擲用の剣を投げ合ってたんだよ。可笑しいだろッ!!!て、おいこ

ら、今の動き中国拳法の秘伝の動きだぞッ!?普通にやったってあそこまでの練度でだせるかよッ!?なに、このクラス。あれがデフォなのか…。うちのクラスのデフォはアレなのかッ!?

「……おい、イッサー。さっきの話は、本当か?」

「いやいや、かなり省かれた説明ですからねッ!?むしろ要点がなに一つ伝わってませんからねッ!?おい、進ッ!お前からもなんかいえッ!」

クラスメートが拳法やら剣やら使って戦ってるのはソウスルーでイッサーが俺に助けを求めてきた。ま、まあ。クラスの女子をほっといてだな、イッサーの方を見ると、頼むから真実を話してくれって目しやがる。はあ……しゃーないなあ……。

「何だよ、イッサー……。俺とお前の熱い夜はどこに消えちまったんだよ……。2人で色々して熱くなって疲れたからいつのまにやら寝てたんじゃないか」

なんでイッサーをいじるのを抑制しなきゃならん。俺はイッサーをいじるのに関しては一切の妥協はしない。

「なんでそつち方面に突き落とすんですかコノヤロウウウウウウー……ッ!!!」

イッサーの絶叫と女共の黄色い歓声が聞こえる。あ、2人ともドン引きしてる。

「イ、イッサー。おまえ……」

「ま、まじかよ……」

おまえら驚いてるのはわかるが、俺もこのクラスの戦闘能力に驚いてるよ。なんなんだよ、これ。さっきの女子今の発言でさらにヒートアップして戦ってたんだが…。

「ま、まてッ!! 待ってくれッ!! 確かに俺はコイツのウチに行って泣いたり泊まったりなんかしたが、ベーコンでレタスな事なんてしてねえッ!!」

イツセーがほぼ半泣き状態で叫ぶ。てか、さすがに飽きてきたな。そろそろ四時間目も始まるし、このへんでやめといてやるか。

「まあ、確かにコイツはウチに来たが、なんか相談事があったらしいから来たんだとさ。んで、その問題を解決するためにゲームしてたらそれが面白くてな。夜遅くまでやってたら気付いたら朝だったってだけだ」

「え? ほ、ホントだよな? 嘘じゃないよな? 信じていいよな?」

メガネが恐る恐る聞いてきやがった。隣にいるH A G E……めんどういな。ハゲもどうなんだ? って顔してやがる。

「マジだったの。さすが飽きてきたからな。いい加減にネタばらしだ」

そういうとクラスからは脱力感と失望感が三人からは安堵のため息が出てきた。

「いやあ、焦った。まさか我らが同士、イツセーがベーコンでレタスなのかと思ってしまったよ」

「そうそう。危づく驚きのあまりメガネが割れるところだった。本当に意地の悪い冗談だなイッセーよ」

「いや、なんか俺が悪いみたいなき感じになってるけど俺悪くないから。悪いのはす…」「キンチョール」進様ではなく、すべて私悪いのですハイハイハイーッ!!」

すごい早さで土下座したぞ? コイツ……。そんな土下座しているイッセーにメガネが思い出したように聞きやがった。

「そうだ。それでその相談って一体何なんだよ? 俺や松田には言えないようなことなのか?」

まあ、ある意味いえないわな。いったらのろい殺されそうな事だし。

「水くさいじゃないか同士。俺たちの中にエロは合っても遠慮はないだろ?」

ハゲ、誰がうまいこといえていった。あと、その中に俺は入っているのだろうか……。

土下座していたイッセーがその言葉で思い出したように顔をあげた。

「そудだッ!! 3人とも今日、放課後あいてるか? 見せたいものがあるんだ」

「なんだよ、イッセー。見せたいもの? 新しいAVでも買ったのか? よし、今日見にいこうじゃないか。なあ、二元浜」

「ああ、そうしよう。まったく、イツセーも水くさい奴だな。そうと決まれば、学校においてあるビデオを持って行くんじゃないか。手伝ってくれ、松田!!」

そんな感じに浮かれてる2人をよそに、俺はイツセー聞いた。

「なあ、イツセーもしかして件の人にあわせるのか？」

「ああ、2人には悪いが、俺はもう別次元の世界にいることを証明しなくてはいけない。そう俺はッ!!勝ち組だからなッ!!エロエロな事が出来るからなッ!!」

「ああ、そ。ノロケかよ……まあ俺も行くかな。てか、眠いから寝るな?放課後になったら起こしてくれ」

了解という言葉を待たずに俺は眠ることにした。

ところ変わって放課後時刻は四時半。地元でも大きめの公園に野郎4人はきていた。

「なんだよイツセー。こんな所に連れてきて。パンチラもブラチラもなにもないじゃないか」

と喋ってメガネをキザっぽくあげる山田。

「まあ、まあよ。そろそろ……あ、きたッ!!」

イツセーが向いていた方向にスレンダーで整った顔をした美少女が歩いてきた。

「おまたせ、イツセーくん なにか用かな？」

キレイな声をした女だ。うん、確かに。カワイい。するとイツセーが自慢げに言葉を紡ぐ。

「紹介するぜ、お前ら。天野夕麻ちゃん、俺の彼女だ」

そういつた瞬間2人がさわぎたしていたが、俺にはまったく聞こえなかった。いや、聞いている余裕が一ミリもなかったからだ。例えるなら、のど元にナイフを突きつけられているような。後ろたたれて拳銃を頭に突きつけられているような恐怖にみまわれていたからだ。

一瞬で。ほんのちよつとの気まぐれでイツセーやハゲやメガネを殺すことのできるほどの存在。そんな存在が今目の前にいる。なんだよ、コイツ。人間とか人間じゃないとかの話じゃない。殺される。ほんのちよつとの気まぐれでほかの三人はおるか、俺すらも簡単に殺れる。こいつはマズい。あれは、いけない。アレは、俺以上の異常な存在だ。コイツはこの世界にいちゃいけない。

「ッ痛」

ずきりと小さな鋭い頭痛が生じる。たまらず頭で押さえたと同時に頭の奥から「こえ」が聞こえてきた。

逃ゲロ

今スグ逃ゲロ。何モカモカナグリ捨テテ生キルタメダケニ逃ゲロ。無様ニ滑稽ニ情ケナク今スグ逃ゲロ。ソウシナイト  
才前ガ死ヌゾ。

サア、今スグニ逃ゲロ。

逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ  
口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ  
口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ  
口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ  
口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ  
口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ  
口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ

「ったあく…。何だっつてんだよほんとにこれはよ……」

現状とそしてこの頭痛に対して発した一言には弱々しさしか感じられなかった。